

## 「バテ松」と共に

坂田藤男  
(47社)

皆様は、国立キャンパスにあった「バテ松」をご存知でしょうか。

「バテ松」とは、陸上競技グラウンドのフィールド内にあった大きな松のことで、一橋グラウンドの名物でした。四〇〇メートルトラックの第四コーナ―付近にありましたので、練習で、試合で、最後の力を振り絞ってラストスパートをかける日印でした。勝利の思い出も、苦しい練習の思い出もこの「バテ松」にからんでいます。青春の一時、この「バテ松」を眺め、共に練習に明けくれた陸上競技部員は、世代を越えた「バテ松仲間」なのです。



新グラウンド航空写真

「バテ松」のあった一橋グラウンドは、一九二六（大正一五）年六月、東京商科大学（当時）陸上競技部関係者の「明治神宮外苑と同程度のグラウンドを」という強い要望を受けて実現した、八八年の歴史を有する極めて立派な由緒あるグラウンドでしたが、時の流れには勝てず老朽化が進んでいました。日本陸連公認検定の実施に合わせて、全面

的に改修工事を行い、今年の三月に最新の全天候型ポリウレタン舗装のグラウンドに生まれ変わりました。

全天候型化は、八八年前の建設以来の大改修で費用面でも、スケジュール面でも、難しい問題を抱えていました。ここで立ち上がったのが陸上競技部OB会（一橋陸上競技倶楽部）でした。

二〇一〇年六月に「グラウンド改修検討委員会」を立ち上げて検討を開始し、その検討結果を翌二〇一一年三月のOB総会に報告。多くの「バテ松仲間」から全天候型グラウンドへの改修工事に賛同を頂き、工事の具体化に向けてスタートを切りました。最大の課題は資金計画でした。OB会も協力して業者から工事費用をヒヤリングし、必要な金額をはじき出しました。同時に資金集めの具体策を策定し、同年九月には体制を構築、翌二〇一二年一月から

二〇一五年六月末までの三年強の期間をかけて募金を集めることにしました。度重なる説明会では賛否両論が噴出し、激しく議論が交わされたこともありましたが、二〇一二年六月末までに、多くの「バテ松仲間」から寄附が寄せられ所期の目標を上回る額を確保しました。この資金をもとに大学側で最終改修案を作成、二〇一三年一月末から工事を開始し、厳しいスケジュールでしたが、消費税増税前の本年三月末に完成しました。

工事の最終段階でトラック周囲の多くの樹木が競技に支障をきたすため、切り落とされることになりました。「バテ松」は、樹幹に桜の木が巻き付き、このまま残すと枯れて倒れるなど危険な状態になる可能性がある判断され、残念ながら伐採せざるを得ませんでした。

四月七日にグラウンド使用開始宣言、五月二六日には山内学長をはじめ、お世話になった方々による「グラウンド完成お披露目会」のテープカット。そして七月一二日には、こけら落としの大会として、第六四回旧三商大戦が行われ、新しい時代がスタートしました。「バテ松」はなくなりましたが、「バテ松仲間」の心には、いつまでも「バテ松」が残り、次の世代に伝えていくことでしよう。

(二橋陸上競技倶楽部 理事、  
元日本アイ・ピー・エム(株) 勤務)